

—浄土門より観たる—

剣道による人間形成

上山智身

序

剣道は武技か体育か競技か哲理か道義か宗教か，それはその人の修得と悟道の深淺如何によって異なる。古来剣道の一門を開いた流祖は皆，生死を賭けた一生の鍛錬と宗教的靈驗によって妙奥に達している。史実を考照すると日本古文献の権威たる大江匡房の著，闘戦経の巻頭に「我が武は天地の初めに在り，而して一気に天地を両つ，若も雛の卵を割るがごとし，故に我が道は万物の根源，百家の椎輿なり」とある。

日本の剣は古くは都流岐または都牟賀理と呼ばれた。刺通すことを意味する。剣を太刀または多知と呼び，一つを二つに切り，二つを四つに切ってその数を殖やし増し加え，これを一つに纏め，生かし育て完成することを古来から日本人は太刀技の道としてきた。日本の武は神武不殺と言って殺さないばかりでなく，武は「む」であり「産」「うむ」「むすび」の義であるとして，われらの先祖は生命の根源と生産の働らきを矛や剣で考え，これを神聖な宝器不可思議な珍器とし，日本民族の生成の象徴としてきた。また兵は平なりと言ひ，兵術を和術と称し，小にしては人と和する術，大にしては天下を平和にする術と教えてきた。この生成と平和の特性から生れてくる道義は即ち育成教化，仁愛慈悲，寛忍忠恕，正義大勇，真鋭純潔，清浄無垢，公明正大，犠牲奉仕，協同互助，勤勉努力，向上進歩などの能動的諸徳である。剣道の真髄はどんな時代になっても，個人にも社会にも欠いてはならない哲理と道義の上に成り立つものと教えられてきた。外国の武の考えはこれと全く違う。漢字の武を意解する説文に「楚 莊王曰 夫武定功戢兵 故止戈為武」とある。戈は悪いものであるからこれを止めるのは武であるとは彼等の考えである。また老子は「夫佳兵者不祥之器 物或惡之」と言っている。また彼等は剣を説く釈名に「剣は検なり，非常を防検する所以なり」とあるように剣の最高目的は悪いものをしらべふせぐ働らきをなすことと考えている。この消極的な凶器の考えと，日本の積極的な宝器の考えとは雲泥の差がある。

足利時代末期の剣道勃興期を経て徳川時代においては武士は常に刀を腰に帯び，剣道は武士の

表芸とまでいわれて武術を修練し、一般庶民から尊敬されていた。それが明治維新になってから封建制度の崩壊、武士階級の消滅と、ついで明治四年の脱刀令、明治九年の廃刀令の発布により帯刀は禁じられ、国民こぞって欧米文化に酔い、剣道は次第に前世紀の遺物の様に見られ次第に衰微を辿り、とだえた感があったが、明治十年の西南戦争、明治二十七年八月の日清戦争と、戦争が起るごとに終るごとに心ある国民の間から剣道の実用性を認識し、次第に勃興の気運がたかまり、当時の中学校、高等学校、専門学校に必修科目として採用され、第二次世界大戦中は当時の国民学校にまで必修実施された。昭和二十年八月十五日戦争終結、日本は内外ともに一大転期を迎えた。しかも、かつてない敗戦という惨めな状態としてであった。そして一時的にしろ社会は虚脱状態であったといっても過言ではない。急激なる政治態勢の変化に伴って、敗戦の反動として、日本民族の誇りとしていた伝統ある武道も禁止されるなど、その他の諸事情により国民思想の混乱を招き、国家再建の中心とならなければならない教育界に於ても、文部省と日教組の確執から生じた教育の混乱に加えて一部民衆、学生等の自由の履き違い、全国的な学生運動の勃興と労働組合の諸闘争など一連の政治不信、労使関係に、世界的イデオロギーによる影響を受け、遂いに反戦平和を口にしながらかつては暴動化さえ図らんとする学生や一部民衆の法秩序破壊にまで発展しようとし、世の中は混沌として治る処を知らない状態にまできた。

この様な社会状態の複雑化された中で、子供を持つ親達にとって、子供の将来への不安、躰る力も権威もなくなったという各自の自信の喪失から、何かの力によって、しっかりした子供に育てねばという希望なり、欲求が盛り上ってきたことは否めない処である。それと並行して、国としても青少年の心身を鍛え、明るい社会造り、人間造りへと国も国民も心向け、各種スポーツの奨励に乗り出し、中でも全日本剣道連盟などの青少年育成への努力により近時目につくことは全国的に見られる剣道の認識が急激に深まり、剣道人口も戦前を凌ぐ程に増加した。それは種々と原因があろう。身体が弱いから、意志が弱いから、人の中に出たがらないとか、また一方にはその武道（剣道）の厳しい練習の中で強健なる身体と、厳格な礼儀作法、躰によって生じてくる根性のある人間、信念のある人間、つまりバックボーンの通った人間に育てたいという親の願いも非常に多いことを直接身に泌みて覚ゆるものである。平和で文化的な日本の再建にも、その基盤となる個々人の人間としての確立こそが急務といわなければならない。

昭和五十一年全日本剣道連盟より剣道の理念及び剣道修練の心構について左記の如く明示伝達された。

（１） 剣道の理念

剣道は剣の理念の修練による人間形成の道である。

（２） 剣道修練の心構

剣道を正しく真剣に学び、心身を錬磨して旺盛なる気力を養い、剣道の特性を通じて礼節を尊び、信義を重んじ誠を尽くし、常に自己の修練に努力し、以って国家社会を愛して広く人類の平

和繁榮に寄与せんとするものである。

そこで剣道の持つ意義と内容から現代の剣道人の人間像は如何にあるべきかを集約するならば、「調和のとれた人物」といえる。然しながら、近時マスコミに報ぜられた学生剣道人の不祥事は洵に悲しむべきことであり、再度問題を提起せぬよう心せねばならない。これら問題点をふまえて深く自省し、主として浄土門（歎異鈔）より徴しつつ概説してみたい。

（一）人間の特性

自分は石でもなく草木でもなく、犬猫の如き動物でもない人間であると申しているが、人間とは如何なるものであるかを特質上からと、生活上からとの両面から人間が他の物と異っているかを考えて見たい。

この頃人々の間で口ぐせの様に不況だ不景気だと言って愚痴をこぼす。新聞広告に棚ざらい大バーゲンと見れば食事もとらずに彼方に走り、此方に出血大安売と聞けば此方に走り、結局電車賃を使って貴重な時間を潰し、くたびれた挙句高い買物をしたと嘆く。恰も蟻の甘きに群り集るが如く、堅実な歩みのない浮き草の様な生活をしているものを、釈尊は流転輪廻の生活と申された。これでは人間に生れた所以がないから、人間としての一つの理念を立て、その理念に向って堅実な歩みをせよとすすめられてあるのが仏教であり、釈尊の誕生相はこれを象徴している。五歩でもなく六歩でもなく、七歩と申しておりますのは仏教では迷の世界を六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上）と分けられてありますから、この六道輪廻の生活では生活の意義を認めないから、理想を立て、一步踏み出し、唯我独尊の悟の境地に到達せよと教えているのがあの釈尊の誕生相であると味得するのである。

一刀流極意秘伝の「目の居付」の教えに、目の働らきは物の色と形に止まり、その動きに従って動く。目は映った物の形象動静の所に居付くものである。然るに目に映る形象動静は実体でなくその仮の影である。況や敵が示す諸相は欺くための偽装であることが多い。そこに我が目が居付いていると敵は我が意表に出て、思わぬうちに曲合の利を作って我れを破ることになる。我が目がどこにも居付かなければ敵のすることがわかり、我れは不覚をとることがない。譬えば夜分には風塵強く立っても格別目に入らないのは夜分は見るものがなく、目が何物にも居付いていないから砂塵がまつ毛に当る瞬間に目を閉ざすからである。然るに昼は少し風塵が立っても目に入り易いのは目が何物かに居付いて目に隙があり、そこに入るからである。目が居付くと、心気が居付き、心気が居付くと目もまた居付く、目に心が欺かれず、心に目が欺かれず、常に真相を透視するためには肉眼と心眼とが共に居付くを取り去ることにある。と教えている。

終戦の翌年の夏、当時健在であった母と買い出しの帰路、浅草の浅草寺境内を通り懸ると、或る一隅に黒山の人垣につられ覗き込むと復員兵の男が泣きじゃくりながら、大きな箱の中から洗濯用の棒石鹸を取り出し「外地から引揚げの際、苦勞して持ち帰って来たもので、故郷へ帰るに

汽車賃が無くて帰れないから、この棒石鯨を買ってくれ」と哀願している。母は売れ切れないうちにと慌てて数本買い求めた。

翌日、その棒石鯨が何と濁んだゴム風船の様に細く小さく変り果てて使い物にならず、欺かれたことに気付く。一刀流極意秘伝の「目の居付」の教えの如く、目が居付くと心気が居付き、心気が居付くと目もまた居付く通り、欲心（執着心）の深きこと洵に浅ましき限りである。

即ち人間は思考力を以て現実を転化して行くか、現実の為に思考力が眩惑せられて行くかによって人間と他の動物との差異が生ずるものと云われる。

「菜根譚」の中に「我を以て物を転ずるものは、得も固より喜ばず、失も亦憂えず、天地尽く逍遙に属す。物を以て我を役するものは、逆も固より憎を生じ、順も亦愛を生じ、一毛便ち纏縛を生ず」と申すことは、人間の世界と、物の世界との生活の相違を示したものである。

人間の特質は、思慮を有するところにあると気付く、一つの理想を立てて、在為の生活（在りのままの生活）より当為の生活（あらねばならぬ生活）に一步進まんとすると、眼前に貪欲と瞋恚がうずまいて行手をさえぎるのである。

中国の善導大師の二河白道の譬喩に譬えば人ありて、西に向って行かんと欲するに、百千の里ならん、忽然として中路に見る、二の河あり、一つは是火の河は南にあり、二には是水の河北に在り、云々。

この人は空漠たる原野に彷徨しておりますと、群賊悪獣に追われて、西に向って走り逃げんとした時、眼前に水の河（貪欲は順境に向って起るものであるから水河に譬える）火の河（瞋恚は逆境に向って起るものであるから火の河に譬える）が顕れた。即ち今まで在為の生活をしていた時は、何物も目につかなかったが、さて気付いて当為の生活をしようとして西に向った時、眼前に水、火の二河が行手をさえぎったことは、今までの利欲の生活、瞋恚の生活が人生の普通であり、この心があるからこそ経済も豊かになり、精進もし、努力もし、生活に活力が出ると考えていたことが、却って世の行きづまりを生じ、世を害することになり、最愛なる私をも虐待することになることを示された。

この現実を逃避するところに救いはなく、これを浄化するところに救いはあるのであるから、現実生活を浄化せんとする力と、現実生活に墮落せしめんとする力が闘争し、苦悶しつつあるのが、人間生活の一特徴である。

小野次郎右衛門忠一の弟子、中西四代の中西忠兵衛子正の和歌に

尋ねても また尋ねても 尋ねても

尋ねあたらぬ 剣術の道

とある。深く歌の心を拝するに斯道の幽玄さはもとより、古剣聖の一生は現実を深く内省せられ、愛欲、名利の生活を悲嘆痛傷せられてあることを、歌の裏に味得され洵に尊い極りである。

(二) 視野の拡充

人間の特徴は思慮多きところ、即ち考えると言うところにあると申されるが、一体如何なることを考えるべきか、それには先ず、自己の存在と言うことを考えねばならない、最も幼稚なときは自分のみに専念で他人のことなど考えない、少年の剣道試合に見る如く理合もなければ相手の存在も考えない。唯、我むしやりに打ちまくるのみである。幼児の生活相を見ましても親が忙しかろうが都合が悪かろうが一向にお構いなしに泣き叫んで自己の欲望を満すに専心である。我むしやんな生活が幼児の生活である。それから次第に視野が広がると自分一人の生活も存在も認めない相互相関的存在に気付く様になる。譬えばホールに百箇の鏡の円球を吊し、円球は相互を映すが如く、Aの円球にはBの球を映し、Bの円球にはAの球を映し、Cの円球にはA、Bの円球を、A球にはB、Cの円球を、B球にはA、Cの円球を映すという具合に、各々の一円球に九十九箇の球を映し映されている様に、自分自身は孤立なものでなく、全体の生命と私自身の一生命とが深い関係にあることに気付く、大にして申せば私の生死によってこの宇宙は変化し、小にして申せば我が家庭に影響を及ぼす。

初めは自己のみしか見ることの出来なかったものが、視野が広がると、空間的に横に現存するものと、私との関係を見、時間的には現存のものには親があり先祖があって今日に至り、今日の存在は、子供、孫へと永遠に時間的に縦の関係を見るに至る。この堅横、三世十方の関係をすることは同一であっても、その見方が個々別々のものが相対的關係を有するものと見るか、亦、総てのものが一脈の生命を有し、同体的に見るかによって非常なる相違を生ずる。先輩後輩間のトラブルは、前者に属する相対的対立関係を有するものと見る視野の狭きに因を見ることが出来る。

(三) 西洋思想の我國民に及ぼしたる影響

(1) 日本精神の復興

明治維新以来、日本の思想界というものは、純日本の思想で生きてきたかという、そうではない。徳川三百年の間、国の門戸を鎖して諸外国との交流を避けて、日本は日本だけでという気持で生きてきた。所が明治の新政で開国進取の国是が定って、封建制度を根本から打破し、諸外国と肩を並べて行かなければならぬ様になり、物質文明は勿論のこと、精神文明に関する思想まで取り入れる様になった。今まで大きな堤を拵えて、向うから水が流れ込まない様に努力して来たものが、明治維新に一気に此の堤を崩して清濁合せ流れ込んで来た。日本の進歩発達のために役立つ良い思想も入っても来たが、亦、日本の醇風良俗と考えられている家族制度の根柢に向って動揺を感じしめる怖ろしい思想も流れ込んで来た。明治以来今日まで約百有余年、この間に西洋諸国の種々雑多の思想が流れ込み、そして日本が成長発達をした。その為に、生え抜きの日本思

想が汚され、そこで一時は、思想と言え西洋思想のことだと云っても過言でない位に日本思想は之に風靡されてしまい、思想問題というのは皆西洋思想の受売りであったと云ってもよい様な時代さえあった。幸にして最近日本精神の復興と云う様な声が自然とたかまり、戦前を凌ぐ程の武道の興隆を観るに至ったことは、即ち、日本国民として、日本独自のものを光り輝かして行かなければならぬ時代になって来たのであると云う気持、それが発して日本精神の復興となって現れて来た、と言え云えるのである。

(2) 西洋思想の主流

種々雑多の西洋思想が日本に流れ込んで来たため、日本の思想界は混然として、一般国民は何処に適従してよいのかその帰趨を失う状態となった。

英国からもドイツからも、フランスからもアメリカからも入って来た種々なる思想、それらの種々なる思想の中に貫流している潮流は、「自我の自覚と、それに伴う自由平等の要求」と云う考え方で、これが西洋思想のどの思想にも根柢となっていると考えられる。

(3) 自我の自覚

十七世紀になると、英国にベーコン、フランスにデカルト、その他多くの学者が出て、近世の科学や、哲学も急速度の進歩発達を見るに至った。是等の学者は如何なることを考えたかと申しますと、思想と云うものは自分の思想であるべきである、それが本当ではないか。自分の思想であるならば、これは自分の自由でなければならぬ筈だ。自由でなければならぬ自分の思想を、バイブルの教権や何かで抑圧されることは全く理不尽である。こういう見地から自分の思想は自分の物だと云うことを明確にさせねばならぬ、と考えたのがデカルトでありベーコンである。デカルトの遺した有名な言葉に「我疑う、故に我存す」と云うのがある。これは総てのものは疑える、それを疑う自分の存在だけは疑うわけにはいかぬ。茲に初めて「我」というものを発見したわけである。自我というものを自覚したわけである。即ち十七世紀に色々の学者が出て、学問的に自我を自覚して、その自我が自由でありたい、平等でありたいと要求してこれを獲得した。

(4) 東洋思想と西洋思想との根本相違点

デカルトが「我疑う、故に我存す」と言ったが、斯ういう思想は、ギリシャの昔からあるのである。ギリシャの三大哲学者と言われるソクラテス、プラトン、アリストテレス、そのソクラテスがデルホイの殿堂に掲げてあったといわれる「汝自身を知れ」お前はお前自身を知れという言葉を用いて自らも戒め、人をも導いたと伝えられている。だから西洋思想のルーツを辿れば、結局自我中心ということになる。汝自身を知れ、お前はお前自身が分らなければいかんということ、を、私の方へ受取っていえば私が私を発見すること、即ち自我を自覚する、その自我が自由でありたい、平等でありたいということ、を、十七世紀にベーコンやデカルトを先頭に立てて要求した。

西洋の思想は自我中心の思想であるから、自我の自覚というところに重点を置いて、自我即ち「俺」が自由でありたい平等でありたい、ということ、を要求した。これが西洋思想、ギリシャ

以来の凡ての思想を貫流している所の根本思想だと考えられる。ここに西洋思想と東洋思想との最も著しい相違点を発見することが出来る。

「俺」中心の西洋思想に比較して東洋思想はどうかと申せば、仏教も儒教もあるが、仏教にしても儒教にしても俺中心ではない。仏教では「無我」を根本教義として、己れというものを認めない。儒教では己れは認めるけれども、己れを克服することが良いと云っている。「克己復礼」という言葉があるが、克己とは己れに克つ、即ち自我を征服することである。克服するところに道があると説いている。

即ち、西洋思想では俺中心の思想で、自我の自覚ということ、或は汝自身を知れ、或は我疑う故に我存す、と云って、己れを立てて行く。所が東洋思想は己れを認めない、或は己れというものを征服するというところに立場をもっている。

十九世紀になって、ヨーロッパの労働者が何故経済的に自我の自覚を持つ様になったか、労資の関係が何故あんなに深刻にもなり、労働運動が労働争議にまで展開する様になったかというところ、
「俺」中心「自我の自覚」が土台であるから、そういう立場に立つと「資本家が儲け過ぎる、働くのは俺達だ、生産する者は俺達だ、儲けさせてやっているのは俺達だ」俺中心であるから左様に考える。資本家は資本家で、俺中心であるから「労働者なんて搾取の対象だ。搾るだけ搾って、儲けるだけ儲けてやれ、愚図愚図云えば首誅りだ」労働者も俺中心、資本家も俺中心、利害相反すれば喧嘩するに決っている。

ところが日本は元来俺中心でない。主人は雇人の為を思い、雇人は御主人に忠誠を尽す。お互いが相手の立場を思いやる気持が温情的である。所謂東洋思想と西洋思想との相違はこの点である。

(5) 日本固有の醇風良俗

西洋の利己的個人主義が現代の青年男女の頭を支配していることを見逃すことは出来ない。戦後若い男女間に俺中心の生活を希望する風潮がたかまり、「姑嫁別居論」など唱えられ、未婚の女性側の希望として、家付き、土地付、車付き、その上、じじい、ばばあ一抜きと大胆にも平気で唱えるものさえある。親子の関係でも親は親、子供は子供という様なことになれば当然、日本固有の家族制度にひびが入って来る。年々、寿命の長命化に伴ない一人暮らしの老人家庭が殖え、特に寝たきり老人の、死後何ヵ月も経て偶々縁者が訪ね来てその死を発見したという、実に悲惨なる社会問題を提起している。殊に未婚の女性に能く能く考えて頂かなければならない。何としても姑のある家に嫁いで、舅姑に仕えたいという気持ちを持てば、我々親の立場から申せば、子供達若夫婦を少くとも二、三年は他所に置いてやろうという気持ちになる。頭の禿げた者と一緒においても一向に面白くないこと夥しいに決まっている。大きな声で笑うことも話すことも遠慮しなければならぬかと考える時、気の毒でせめて二、三年は気儘な生活をさせてやりたいと思うのが親の情である。しかし舅姑がその様に二人だけでのんびりさせたいと考えても、若夫婦が別居

を喜ばないというのであれば同居も亦結構である。その時には舅姑が隅の方で小さくなって、なるべく目に付かぬ様にと気遣うのが親が子供に対する思いやりである。

所が「俺達の若い時分は苦勞して舅姑にこうして仕えてきたのだから、お前達も苦勞するのは当然だ」という気持ちを出せば、どうしても新旧思想が激突する。

そこで、我々の父母なるものは、実に気の毒な時代に成長した人であるから、私達の欲望を犠牲にしてでも孝養を尽くそうとなれば、必ず姑嫁相和し、家庭は円満である。

(6) 風楊の教え

少年の頃、私の恩師、大森美代次先生より常に「風楊の手」について、必ず稽古が了えてから門弟に話された。即ち

風が八の力で吹けば楊は二になって靡き、十の力で風が吹けば楊は零で靡き、風が零になれば楊は十となって押し戻る、相手が石(陽)と出れば綿(陰)の如く受け止め、相手が綿となれば我は石と出よ。と、相手が石となり我も亦、石と出れば火花を散らして見苦しき様を呈す。と。

一体、十というのが理想である。五と五とでも十であり、「二」と「八」でも「十」になる。老夫婦が「八」の力であるならば、若夫婦は「二」の力になればよい。老夫婦が「二」になったら、こんど若夫婦が「八」になればよい。老夫婦、大往生万々歳を遂げたら、若夫婦は「十」になる。若夫婦に子供が授かれば、こんどは子供の為に「八」ともなり「二」ともなり、ときによっては「零」ともならなければならない。相依相資、お互に思遣いを掛け合うならば、家庭でも亦クラブ活動に於ける先輩後輩間に風波の起る気遣いはないのである。

(7) 弟子一人もなし

歎異抄第六章に

専修念仏のともがらの、わが弟子ひとりの弟子といふ 論のさふらんこそ、もてのほかの子細なり。親鸞は弟子一人ももたずさふらう。その故は、わがはからいにて、ひとに念仏をまうさせさふらはばこそ弟子にてもさふらはめ。ひとへに弥陀の御もよほしにあづかりて念仏まうしさふらふひとを、わが弟子とまうすこと、きはめたる荒涼のことなり。つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなるることのあるをも、師をそむきてひとにつれて念仏すれば往生すべからざるものなりなんどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほにとりかへさんとまうすにや。かへすがへすもあるべからざることなり。自然のことはりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり、云々。

この第六条は「親鸞は弟子一人ももたず」との宣言である。その理由は、和の教えで、人々に念仏を申させる様にしたのであれば、わが弟子と言えるが、如来のおはからいのお蔭で念仏申される方々をさして、自分の弟子と言うのは、大変無遠慮なことで、勿体ないことである。私(親鸞)も如来のおはからいで法を説き、念仏を称えさせて頂いているので「弟子一人も持たず」、総ての人々を同朋として親しみ、同行としてかしづかれた。

覚如上人の口伝鈔には「親鸞は弟子一人ももたず」のお詞を詳しく示して

「なにごとをおしへて弟子といふべきぞや、みな如来の御弟子なれば、みなともに同行なり」と。

また、蓮如上人の御文章に

「故聖人のおほせには、親鸞は弟子一人ももたずとこそおほせられ候ひつれ、そのゆへは如来の教法を十方衆生にとききかしむるときは、たゞ如来の御代官をまうしつるばかりなり、さらに親鸞めづらしき法を弘めず、如来の教法をわれも信じ、人にも教へきかしむるばかりなり、そのほかに、なにをおしへて弟子といはんぞと仰せられつるなり、されば、とも同行たるべきものなり。これによりて、聖人は御同朋御同行とこそかしづきて仰せられけり。」

と述べられた。弟子などというものの一人も見あたらない広々とした心境は真に謙虚である。これに比して、自分は沢山の弟子を持つ師匠であるという誇りは寂しい誇りであり、見苦しい傲慢にとらわれた孤立の境地である。学生剣道人の深く自戒自省せねばならない心の問題である。

武道の各流各派の始祖の苦心、経験、工夫、錬磨、体験、悟達や亦、宗家歴代の積んだ鍛錬とその門弟子の嘗めた辛酸の結晶として伝承された武道（剣道）を唯単に勝った負けた強い弱いの相対的の競技なりと解するところに彼我の対立を生ずる。

剣道の天地は同行偕和の一境地である。

この「親鸞は弟子一人も持たず」というお詞は、師弟の道を見捨てるものでなく、師匠、長上に対して無礼な反抗を示唆するものでないことは、この第六条の最後に、「自然のことはりにあひかなはず、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなり」と仰せられたことを深く味うべきである。

真実に救われる道は、我等のはからうべきに非ず、求めるに非ず、唯、道そのものに救われて行くのである。ここの妙趣を親鸞聖人は

「唯信鈔文意」に、

自はをのずからといふ、をのづからといふは、自然といふ、自然といふは、しからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめて、ともかくもはからはざるに、過去、今生、未来の一切のつみを、善に転じかへなすといふなり、転ずといふは、つみをけしうしなはずして、善になすなり、よろづのみづ、大海にいれば、すなはちうしほとなるごとし、弥陀の願力を信ずるが故に、如来の功德をえしむるがゆへに、しからしむといふ、はじめて功德をえんと、はからはざれば自然というなり。と述べられ、

また「未燈鈔」には、

自然といふは、自はをのずからといふ、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふは、この如来の御ちかひなるがゆへに、しからしむるを法爾といふなり、法爾はこの御ちかひなりけるゆへに、しからしむるを法爾といふなり、法爾はこの御ちか

ひなりけるゆへに、をよす行者のはからひのなきをもて、この徳のゆへに、しからしむといふなり、すべてのひとの、はじめてはからはざるなり、このゆへに義なきを義とすとするべしとなりと申されている。

自然法爾の境地は、大小の聖人も、善惡の凡夫も計らうことの出来ぬとある。それで親鸞聖人は「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」と申され、こうした仏願の前には、老少善惡の人をえらばず、善もほしからず、惡をおそれないと申されている。

自然法爾の白道に照らされた時、自分のはからいが、そらごとであり、たわごとであり、自分の力がいかにかよわいかを知らされる。

(四) む す び

「往生論註」下に、菩薩が遠離すべきものに、次の三つを説かれている。

一には知恵門に依って自樂を求めず、我が心自身を貪著するを遠離せるが故にとのたまへり。進むを知って、退くを守るを智と曰ふ、空無我を知るを慧と曰ふ。智に依るが故に、自樂を求めず、慧に依るが故に、我が心自身に貪著するを遠離せり。

二には慈悲門に依れば、一切衆生の苦を抜いて無安衆生心を遠離せるが故にとのたまへり、苦を抜くを慈と曰ふ、樂を与ふるを悲と曰ふ。慈に依るが故に一切衆生の苦を抜く、悲に依るが故に無安衆生心を遠離せり。

三には方便門に依れり、一切衆生を憐愍したまふ心なり。自身を供養し、恭敬する心を遠離せるが故にとのたまへり。正直な方と曰ふ、己を外にするを便と曰ふ。正直に依るが故に、一切衆生を憐愍する心を生ず、己を外にするに依るが故に、自身を供養し恭敬する心を遠離せり。

と説かれている。菩薩は、智慧によって、空無我を知り慈悲によって、一切衆生の苦を抜いて樂を与え、方便によって、利他を先にし、自身に貪著することなく、自身を恭敬することがないと云うことで、この智慧、慈悲、方便の菩薩行を劍道人のよく実践せんとするところに調和のとれた劍道人となり、これが大いなる輪となって展開されて行くところに娑婆即寂光土となる。

参 考 文 献

- 引用 一刀流極意 p.5～6 笹森順造著 1965年11月15日発行
- 歎異鈔入門 本多顯彰著 1968年12月10日発行
- 我等の歩み 小山法城著 1940年5月1日発行
- 信ずる力 高島米峰著 1936年10月27日発行
- 歎異鈔講話 梅原真隆著 1934年10月20日発行
- 劍道必携 広光秀国著 1971年5月5日発行